日本語教育現場における
ガ行鼻濁音について

吉田潤子

1．はじめに

日本語のガ行音には、軟口蓋破裂音[g]で発音するものと、軟口蓋鼻音[ŋ]、いわゆるガ行鼻濁音がある。このガ行鼻濁音は、一時期「美しい日本語の発音」として持てはやされ、その存在を重要視する風潮もあった。元々は、日本語共通語の母体となっている東京方言にガ行鼻濁音の厳格な法則があったため、この音は規範的・標準的な音とみなされてきた。アナウンサーや舞台俳優などに対し、徹底した発音指導がなされるなど、スタンダードな発音として保持されようとしてきたが、現在では国語教育においても鼻濁音指導は学習内容に含まれておらず、また、若者を中心にこの音を使用しない傾向も見られ、ガ行鼻濁音は日本語の中から消えつつある音だとも言われている。

しかし、日本語教育で使用されている聴解教材には標準語が採用されているため、ガ行を鼻濁音で発音している箇所が少なからずある。そのため、学習者からガ行が違う音に聞こえるという声を聞くこともある。また、日本語教育現場におけるガ行鼻濁音の指導については、教師間に共通の認識はなく、見解が分かれるところでもある。

そこで本稿では、このガ行鼻濁音が実際日本語学習者にどのように聞こえているのかを、日本語学習者に対して複数のテストを実施し、その聞こえ方における傾向を探った。その結果をもとに、日本語教育現場におけるガ行鼻濁音の扱いについて、考察を試みることとする。

2．研究目的

日本語学習者にとって判別困難な音のペアが存在する。例えば、清音－濁音ペ

ア（「ついて」と「ついで」、「柿」と「鍵」など）、一方に撥音又は促音を含むペア（「自分」と「人文」、「蜜」と「三つ」など）である。そして、これらの存在が誤用を引き起こす一因となっている。その発生原因の一つに、日本語と日本語学習者母語が持つ特性の差がある。これは既に多くの研究により明らかとされているところでもある。しかし、その誤用要因は必ずしも学習者母語からの影響とは限らず、我々日本語母語話者の発音の中にも存在すると考えられる。

そこで本稿では、ガ行鼻濁音に注目し、日本語母語話者が発するガ行鼻濁音が日本語学習者の誤用要因になり得る可能性を様々な調査から検証･考察を試みた。本調査では、まず日本語教育現場におけるガ行鼻濁音の扱いについて、現場教師にアンケートを実施した。次に、その結果をもとに聴解テストを作成し、中国語を母語とする日本語学習者に実施し、その聞こえ方における傾向を探った。中国語話者は清濁の区別が困難とされているため（玉村文郎1998）、ガ行鼻濁音とともにガ行音についても実施した。これらの結果を踏まえ、日本語教育現場で今後どのような位置付けでガ行鼻濁音を取り扱うべきかを検討する。

３．ガ行鼻濁音

3.1　変遷と現状

東京方言には厳格なガ行鼻濁音に関する法則があり、日本語共通語の母体がこの伝統的な東京方言に由来していることから、この音は日本語共通語の規範的、標準的な発音とみなされてきた。また、この規範性だけではなく、ガ行鼻濁音が愛される理由として、金田一春彦（1978）では、

A．帝都で標準音として用いられていたのは[g]音ではなく[ŋ]であること
B．[ŋ]音は[g]音に比して古い伝統をもった音韻であること
C．わが日本領土内において[ŋ]音の方が[g]音よりも広い地域にわたって分布していること
D．[ŋ]音のほうが[g]音よりも耳に軟く響きが美しいと感じられること

金田一（1978:169-170）

の4点を挙げている。Dの「美しい」と感じる音韻について金田一は、

> 多くの場合において、その音韻そのものがもっている性質ではなく、その音韻がどういう人たちによって発音されるかによって決まるもので、教養のある人の発音、文化が進んだ地方の発音は、教養のない人の発音、文化の後れた地方の発音よりも優美なように感じられるというのが鉄則である。

金田一（1978:170）

とし､文化の進んだ地方である東京の人たちが用いる音であることによるもので、[ŋ]が[g]よりも美しい音であるという根拠は重要ではないとしている。しかし一方で、

> 鼻濁音の持っているまろやかな響きは日本語の発音の美しさの一つである、と考える人びともまだ多いです。
>
> ＮＨＫ放送文化研究所（1998:12）

このように鼻濁音を「美しい」と感覚的に評価する人々も少なからずいることも事実である。

また、金田一（1978）は昭和16（1941）年2月に、当時勤務していた東京都立第十中学校の生徒70名に対し、ガ行音の発音調査を行い、「全然[ŋ]音を用いていないものが20名で全体の3割を占め、全てを[ŋ]音で発音するものとほぼ同数に達している」という調査結果を残している。これを受け、大橋純一（2007）は昭和前期を鼻濁音衰微の萌芽期と受け止めている。そして、以降急速に[g]優勢へと推移していくのである。

大橋によれば、現状ではガ行鼻濁音は「美しい」日本語だとする擁護的立場が根強く存在する一方、[g]化が進む現代において、[ŋ]を規範とすることへの疑問を感じながらも[g]を標準音と認めるには至らない躊躇的立場もあるとしている。単に東京方言に由来する[ŋ]の規範性を求めるだけではなく、日本人の持つ美意識として[ŋ]に柔らかさや暖かなイメージがあることから、衰退の一途を辿っているとはいえ、しばらくは標準音相当の評価が持続していくと大橋は予測している。

3.2　ガ行鼻濁音を使用する箇所

標準語に見られる、ガ行鼻濁音を用いる場合の規則性は以下の通りである。

① 和語・漢語の場合、語頭に来るガ行音は鼻音にならないが、語中・語尾に来るガ行音は鼻音になる。
② 助詞の「が」は常に鼻音になる。
③ 語頭にカ行音を持つ語が複合語の後部要素になって連濁現象を起こす時は、すべて鼻音になる。
④ 外来語や擬声語のガ行音は、語頭、語中のすべてで鼻音にならないのが原則である。しかし、日本語化の進んだ外来語や「ン」の後ろでは、鼻音になることがある。

日本放送協会（1987：348）

3.3　日本語教科書におけるガ行鼻濁音の扱い

土岐哲（2010）では、音声に関する記述がある14冊の日本語教科書において、音声項目17項を挙げ、どの程度詳しく音声に関して触れられているかを調査している。ガ行鼻濁音の扱いについては、「この発音が実現する環境の説明は、全体として不完全なものが多い。」（土岐 2010:24）とし、いくつかの教科書におけるガ行鼻濁音の扱いを紹介している。ここでは、その中でも土岐が挙げた17項目全てに関する記述がある“Beginning Japanese”（1962）におけるガ行鼻濁音に関する記述を概観してみる。

ガ行鼻濁音の表記を[ḡ]と示し、ガ行音[g]と区別しており、「[ḡ]は[g]と同じ舌の位置で、鼻から息を抜き‘singer’の‘ng’のように発音する」とし、語頭には現れないと明記している。また、「‘ī’の前の‘ḡy’‘ḡ’は、舌を‘y’の位置で‘bring you’の‘ngy’のように発音する。」と、かなり詳細な説明が施されている。そして、「[ḡ]は東京方言に現れ、東京方言話者は[g]の代わりに[ḡ]を用い、また[g][ḡ]両者を用いる者もいる」としている。これについての説明として、

例：GA-i：語頭に来た場合、東京方言話者はすべて[g]で発音する。
　　KA-ḡu:語末の場合は[g]と発音する者、[ḡ]と発音する者、また両者を用いる者がいる。

このような例を示し、語頭は[g]、語末は[ḡ]という東京方言の規則性を補足している。

最後に「日本語学習者はどちらを発音してもいいが、[g]には二つの発音があることを理解しておかなければならない。そしてこれは東京方言の特徴であるということが重要である」と結んでいる。

土岐（2010）は「ガ行鼻濁音に関する記述は不完全なものが多い」と述べているが、“Beginning Japanese”のようにかなり詳しく紹介されている教科書もある。一方、国内で使用されている初級日本語教科書には、このような詳細な記述は見られない。ここに、ガ行鼻濁音を始めとした音声に関する扱いが徹底されていない、国内の日本語教育事情を垣間見ることができる。

４．日本語教育現場におけるガ行鼻濁音の扱い

日本語教師たちは、ガ行鼻濁音をどのような位置付けで捉えているのであろうか。そこで現職日本語教師の協力を得て、日本語教育現場におけるガ行鼻濁音に関する実態調査を行った。

4.1　調査概要

本調査では、年代によりガ行鼻濁音の学習経験の有無が存在すると予測し、20

〜60代の幅広い年齢層の日本語教師（常勤・非常勤）43名にアンケート調査を依頼した。

アンケート調査の質問項目は以下の通りである。

① 次の文を声に出して読んだ場合、ガ行部分が鼻濁音になる箇所に○を付けてください。（卒業旅行で15人の学生が迷子になった。）
② 学校、または日本語教育機関で、ガ行鼻濁音の発音指導を受けた経験がありますか。
③ 発音指導の際、ガ行鼻濁音を指導しますか。
④ 学習者からガ行鼻濁音について聞かれたことはありますか。
⑤ 日本語教育現場におけるガ行鼻濁音について、ご意見、お考えをお持ちの方はお聞かせください。

4.2　調査報告

被験者43名の内訳は図－１の通りである。

また、教師の出身地分布は図－２の通りである。

まず、「①次の文を声に出して読んだ場合、ガ行部分が鼻濁音になる箇所に○を付けてください。（卒業旅行で15人の学生が迷子になった。）」の問いでは、文中にある以下の5か所のガ行音について回答を求めた。

そつ**aぎょう**りょこうで　じゅう**bご**にんの**cが**くせい**dが**　まい**eご**になった

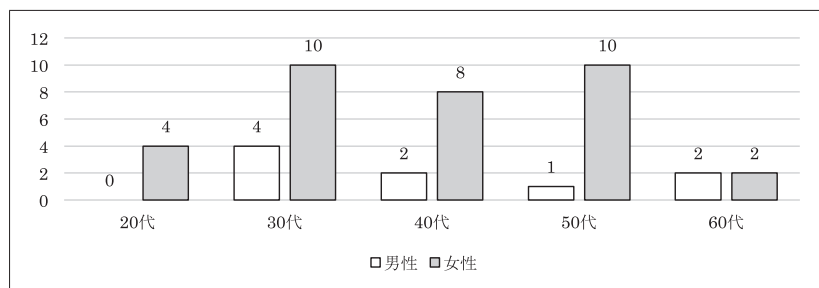
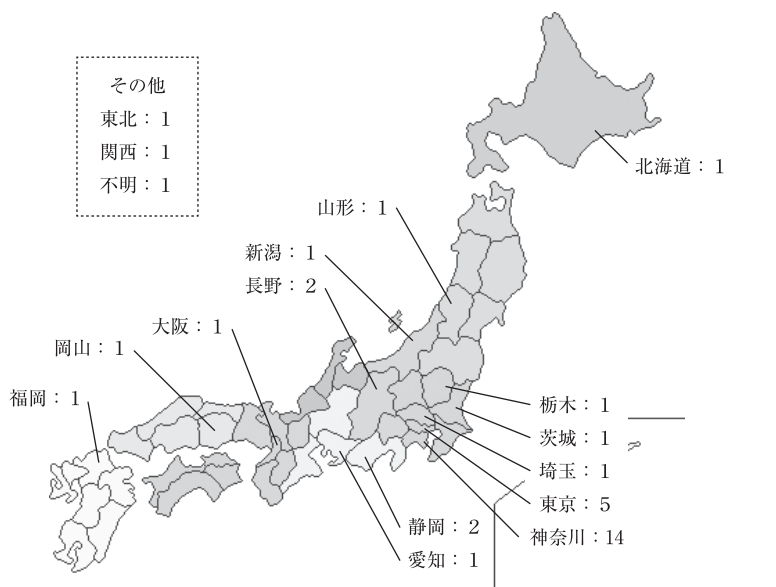
結果は表－１の通りであった。

本調査の目的は、教師の出身地による使用傾向を探ることであった。しかし、東京・神奈川に人数が集中してしまったこと、出身地未記入者が7名いたことなどにより、出身地別に傾向をつかむことは困難であった。しかし、dにおいて興味深い結果が得られた。助詞の「が」が鼻濁音になると回答した教師の内訳は神奈川6名、東京・長野各2名、北海道・東北・茨城・静岡・愛知・福岡各1名（出身地不明3名）で、関東地方の中でも比較的標準語を使用する東京・神奈川・埼玉では、20名中8名（40％）であった。常に助詞の「が」が鼻音になる地域で40％というのは意外な結果であった。

次に、「②学校、または日本語教育機関でガ行鼻濁音の発音指導を受けた経験がありますか。」の問いに対し、Yesが48.8%（21名）、Noが51.2%と、約半数の教師が経験ありという回答があった。日本語教師養成講座、もしくは大学の音声学の授業で[g]と[ŋ]の違い、またはガ行鼻濁音の発生箇所、使用傾向などを学んだという回答が多く、発音指導を受けた教師はわずか7名であった。指導内容は、「鼻をつまんで発音し、音の違いを意識する」がほとんどであったが、中には

(1) 軟口蓋と奥舌を接触させ、勢いよく息を吐きながら話す。破裂させるような感覚。 有声化させて呼気を鼻から出す。鼻の前に手をあて、呼気

（図－１）

（図－２）

（表－１）

a	b	c	d	e
卒業	十五人	学生	が	迷子
（語中）	（語中）	（語頭・中）	（助詞）	（語末）
13	14	9	19	24
30.2%	32.6%	20.9%	44.2%	55.8%

があたるか確認。

(2) “んー”と長く伸ばし、そのまま“んーが”と“が”も発音し、だんだん間隔を縮め最後に“ん”と“が”を同時に発音する。

などのように、ガ行鼻濁音の発声方法を詳しく学んだ教師もいた。学習者に対する指導について言及していたものは

(3) 学習者には[g]でも[ŋ]でも意味に違いはないことを理解させる。
(4) 鼻濁音で発話するように指導しなさいとは言われなかった。

の2件のみであった。また､小学校で発音指導を受けた経験がある教師も3名いた。

「③発音指導の際、ガ行鼻濁音を指導しますか。」という問いに対してはYesが14%（6名）、Noが86%（37名）と、8割強の教師が指導していないと回答した。

(5) 鼻から空気を出しながら発音すると発音がしやすいとアドバイスし、自然な音の出し方を身につけてもらう程度。
(6) 初級で、ひらがなと音韻の一致を教える時に、語中・語末・助詞などにガ行鼻濁音を発音する人がいることを一応教える。

このように、存在を知っておくべきと紹介程度に留める教師や、教材や教育機関で扱っていたために、指導を授業に取り入れた経験がある教師もいた。積極的かつ自発的に授業に取り入れている教師は以下の2名であった。

(7) まず聞き分け→音出し→鼻の奥を意識させる。(鼻をつまんだり)
(8) 鼻濁音の発音の仕方（鼻をつまんだり)。どういう時に使うのか。

「④学習者からガ行鼻濁音について聞かれたことはありますか。」という問いに、Yesは37.2%（16名）であった。多くは「ガ行音」が[g]に聞こえない（他の音に聞こえる）というものだ。

(9) シャドーイングの際、CDが「～ですが」が鼻濁音になっていて、聞き取れないと言われた。
(10) ディクテーションの文の1回目は鼻濁音だったのに、2回目は違ったのはどうしてかと聞かれた。
(11) 初級の学生に「すし**が**好きです」「**が**くせいは～です」の「が」は発音が違うと言われたことがある。また、ディクテーションをさせたとき、CDでは「かぎ」といっているのに、「かに」や「かみ」と（学習者が）

書いてしまうことがあった。

(12) ディクテーションでガ行鼻濁音を使ったところ、「先生の発音は「ガ」じゃない」と言われた。

(13) 欧米系の学生に「先生の発音は違う音に聞こえる」と鼻濁音を指摘されたことがある。

また、鼻濁音の存在についての質問も多いようである。

(14)「助詞の「が」が鼻濁音になると中国（母国）で習ったんですが」という質問を受けた。鼻濁音のほうが正しい発音だが、最近はそうでない人も増えているので使っても使わなくてもいいと答えた。

(15) 何年かに一度［ga］［ŋa］は同じかと聞かれる。

(16) ガ行に「カ゜キ゜ク゜ケ゜コ゜」の音もあるのかと聞かれた。耳のいい学生や母語に細かい子音の違いがある国の学生からこのような質問を受けた。

(17) 耳のいい学生に二種類の音があるのかと聞かれた。あるが意味の違いはないと答えた。

(18) 中国の「な」と「ら」が混同する地方（福建省？）の出身者にとっては鼻音の「ガ行」は混乱を招くようだ。

最後に、「⑤日本語教育現場におけるガ行鼻濁音についてご意見、お考えをお持ちの方はお聞かせください。」の問いには、43名中26名（60.5%）から回答があった。（1名につき複数意見あり）

（複数意見）

(19) 指導の必要性を感じない（敢えて指導しない）　23.1%（6名）

(20) 学習者から質問があれば答える　19.2%（5名）

(21) 混乱を招くため、教師はガ行鼻濁音を使わない方がいい（使わないようにしている）　11.5%（3名）

(22) 積極的な指導には疑問　11.5%（3名）

(23) ガ行鼻濁音は指導すべきである　7.7%（2名）

(24) 意識したことがない　7.7%（2名）

（1名意見）

(25) できれば日本語教育で統一して助詞の「が」くらいは鼻濁音にした方がいいが現状からは必要ないとも思う。

(26) 学生の母語により、ガ行鼻濁音を気にするかどうか分かれる。「ガ行」と「ナ行」が混同している学生がたまにいる。

(27) 指導の必要性を考える必要がある。
(28) 自然に身につくのでは。
(29) 聞くための知識として与えることは必要。

4.3　結果分析

日本語教師に対するガ行鼻濁音調査において、標準語エリアで助詞の「が」を鼻濁音で発音すると回答した教師は、20名中8名（40％）であった。これは、常に助詞の「が」が鼻音になる地域においては低い数値と言える。しかし、日本語教師という職業柄、学習者に聞き取りやすい発音を聞かせるために、常に助詞の「が」を鼻音化させずに、意識的に発音する傾向にあるとも考えられる。著者も神奈川県出身であるが、同様の理由で意識的に鼻音化させない場合がある。しかし、本調査からは明らかな原因を特定することはできなかった。

また、アンケート結果からは、学習者にとってディクテーションやリスニングの際に、ガ行鼻濁音が聴解の弊害になり得ることがわかった。よほど耳がいいか、母語に区別がある学習者の場合は、「ガ行」には[g] [ŋ]の二つの音があるとして聞き分けている学習者もいるようである。しかし、[ŋ]が[g]以外の違う音（[n][m]）に聞こえてしまう学習者の存在も、本調査により確認することができた。

このように、日本語教育現場において、ガ行鼻濁音が日本語学習の妨げになり得ると認めている教師がいる一方で、衰退しつつある音に対し、積極的に扱う必要性を感じていないと答えた教師も多い。しかし、CDや教師の発声にガ行鼻濁音が現存しているからこそ、聴解の難しさの指摘が学習者から出るのであろう。

5．ガ行と判別困難なペア

4章のアンケート結果から、ガ行鼻濁音が聞き誤りの要因になり得ることが示唆された。しかし、必ずしもガ行音と他の音との判別を困難にさせる原因がガ行鼻濁音にあると断言はできない。そこで本章では、ガ行と判別困難なペアにはどんなものがあるか、ガ行鼻濁音との因果関係も含め、その原因を探りながらまとめていく。ここでは4章の結果も踏まえ、ガ行と判別困難となり得るものとして、カ行、ナ行、マ行に注目する。

5.1　ガ行とカ行

一般に、中国語圏・韓国語圏の日本語学習者にとって、清音・濁音の判別は難しいとされている。中国語には有声子音（濁音）がないかわり、無声子音（清音）に有気音と無気音がある。中国人には無声子音の多くが有気音に知覚されるため、日本語の清音と濁音の判別を難しくしている。また、韓国語では語頭子音は清音、

語中子音はその前後の音素の種類によって清音と濁音とに分かれる。しかし、表記に清濁の揺れが表れるものもあり、語頭・語中・語末の全てに清音も濁音も表れる日本語は、彼らにとって清濁の判別困難な言語と言える。(玉村1998)
ここではあくまでも清濁の判別についてであり、ガ行が鼻音化した場合はこれに該当しないことを確認しておきたい。

5.2　ガ行とナ行

4章におけるアンケート調査結果に以下の意見があった。

(30)『一人で学べるひらがなカタカナ』(スリーエーネットワーク)を使って、言葉のディクテーションをさせたとき、CDでは「かぎ」と言っているのに、何度聞いても「かに」や「かみ」と書いてしまうことがあった。確かに私が聞いても「かに」に聞こえなくもないと思ったので、私が言いなおした。
(31) 私のクラスではガ行とナ行が混同している学生がたまにいる。

鼻濁音化が原因か否かはここでは言及を避けるが、日本語学習者の中にガ行とナ行が混同してしまう学生がいることは事実である。また､川上秦（1977）では、

鼻濁音はよく言えば柔らかい音だが、かなりあいまいな音であり、特に[ぎ、ぎゃ、ぎュ、ぎョ］(ŋi,ŋja,ŋjɯ,ŋjo）は[ニ、ニャ、ニュ、ニョ］(ni,nja,njɯ,njo）と聞き誤まられやすい。

川上（1977:36-37）

とし、ガ行が鼻音化した場合の、ナ行への聞き誤りを指摘している。しかしこれは、日本語学習者ではなく、日本人の聞き誤りについてである。つまり、母語話者の傾向と同様のことが日本語学習者にも当てはまると言えそうである。
また、ナ行は鼻音であるため、ガ行が破裂音で発音された場合、ガ行との判別が困難になることはないが、鼻音化した場合は聞き誤る可能性は大いにあると思われる。

5.3　ガ行とマ行

マ行については、前出アンケートに「(学生が）CDでは「かぎ」と言っているのに何度聞いても「かみ」と書いてしまうことがあった」(31）という報告があった。ガ行をマ行と聞き間違える学習者もいるようである。確かにマ行は鼻音であり、ガ行が鼻濁音化した場合に判別困難になり得る可能性を秘めている。
また、ガ行は軟口蓋音で、発音の際唇を合わさずに発音するのに対し、マ行は

両唇音である。これが両者の発音における弁別要因の一つと思われるが、この差異は聴解の際にはさほど影響がないようである。

6．ガ行を含む単語とミニマルペアになる単語

では、次にガ行音を含む単語のガ行部分が違う音に聞こえた場合、どのような単語と取り違える可能性があるかを考えてみた。ガ行音が違う音に聞こえることにより、ガ行音を含む単語と、それとミニマルペア[1]が成立する単語とを聞き間違える可能性があるということになる。

そこで、ガ行音を含む単語と、前出のカ行、ナ行、マ行を含む単語とのミニマルペアを語頭、語中、語末に分け調査した。

6.1　ガ行とカ行

表－２

語頭	外資—開始、街頭・該当—回答・怪盗、餓鬼—柿、　額—書く、 崖　—賭け、外国—開国、概算—解散、外観—快感、外敵—快適、 害す—介す、議員—起因、議会—機会、疑似—記事、現状—謙譲・健常 愚図—屑、　原稿—健康、合格—降格、現代—倦怠、合格—降格 瓦礫—枯れ木
語中	障害・生涯—紹介・照会、有害—誘拐、山岳—三角、営業—影響、 うがい—鵜飼い、会合—改稿、化学—価格、記号—気候、化合—加工 海岸—会館、危害—機会、あげる—開ける、死骸—視界・司会
語末	鍵—柿、釘—茎、嗅ぐ—書く、継ぐ—付く、絵画—開花・階下 会議—怪奇・会期、介護—解雇

6.2　ガ行とナ行

表－３

語頭	概要—内容、額—泣く・鳴く、外貨—内科、外食—内職 外—内（的、壁、装、因、周など）
語中	化合—可能、漫画家—真ん中、記号—昨日・機能 外—内（案、以、体など）
語末	鍵—蟹、釘—国、凪—何、禿げ—羽

6.3　ガ行とマ行

表－4

語頭	外装―埋葬、額―巻く、概説―埋設、がさつ―摩擦、誤字―文字 行事―名字、
語中	称号―消耗、歓迎―感銘、開業・改行―戒名 15時―10文字、上がる―余る、
語末	鍵―紙・神、釘―組、凪―波、嗅ぐ―噛む、継ぐ・次ぐ―積む・摘む

7．書き取りテスト

ここでは、前章に示したカ行・ナ行・マ行を含む単語と、ミニマルペアになるガ行を含む単語を用いて聴解問題を作成、日本語学習者に対し書き取りテストを実施し、ガ行鼻濁音が実際にどのように聞こえているかを検証した。尚、カ行も扱うため､清濁音の判別が困難とされる中国語話者の日本語学習者を被験者とし、鼻音化しないガ行音も併せて調査・検証した。

7.1　テスト概要

実施日：　　2012年9月4日（水)、5日（木）
被験者：　　中国語圏日本語学習者[2]
　　　　　　日本語能力試験[3] N1受験レベル（17名）
　　　　　　日本語能力試験N2受験レベル　（15名）　　　　　計32名
テスト形式：筆者作成のリスニングCDを聴解後、解答用紙に記入。（記述式）

7.2　テスト内容及び目的

テストは以下の3パターンを実施した。

7.2.1　Test 1　モーラ書き取りテスト

テストは、ガ行音（ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ・ギャ・ギュ・ギョ)、ガ行鼻濁音（カ゜・キ゜・ク゜・ケ゜・コ゜・キ゜ャ・キ゜ュ・キ゜ョ）をモーラ単位で聞き、聞こえた通りに解答用紙に記入する形式で実施した。その際、漢字は不可とし、ひらがな・カタカナ・ローマ字での記入を可とする旨を解答用紙に記し、口頭でも確認した後テストを実施した。

Test1では、前後音との共起や文意からの類推など、音を特定する際に聴解以外の判断要素を排除した状況下でのテスト実施を目的とした。

（Test 1）

1．テープから聞こえてくる音を聞こえた通りに書いてください。
（ひらがな、カタカナ、ローマ字（ａｂｃ…）のどれかで書いてください。漢字不可）

① コ゜	② キ゜ョ	③ ク゜
④ キ゜ョ	⑤ キ゜	⑥ ケ゜
⑦ カ゜	⑧ キ゜ャ	⑨ ゴ
⑩ ギョ	⑪ グ	⑫ ギュ
⑬ ギ	⑭ ゲ	⑮ ガ
⑯ ギャ		

①から⑧までがガ行鼻濁音、⑨から⑯までがガ行音である。尚、出題は五十音順ではなく順不同で実施した。

7.2.2　Test 2　単語書き取りテスト

日本語にある語で、ガ行を含む単語を聞き、聞こえた通りに解答用紙に記入する形式で実施した。その際、ひらがな・カタカナ・漢字での記入を可とし、その旨を解答用紙に記し、口頭でも確認した後テストを実施した。また聴解実施後、漢字で表記できるものはひらがな・カタカナを消さずに追記表記するよう指示した。単語は6章－1・2・3の中から選択し、ミニマルペアとなる単語と高低アクセント[4]が同一のものを採用した。

Test2では、複数音からなる単語の中のガ行音、ガ行鼻濁音の聴解状況の把握が第一の調査目的である。また、本調査では「日本語にある単語」というヒントを与えて実施した。これは、ガ行音が他の音に聞こえた場合に、他の「日本語にある単語」を選択する可能性を調査する目的がある。

（Test 2）

2．テープから日本語の単語が流れます。聞こえてくる音を聞こえた通りに書いてください。
（ひらがな、カタカナ、漢字のどれかで書いてください。）

① 概算（ｶﾞｲｻﾝ）＿＿＿＿
〈解散〉

② 有害（ﾕｳｶﾟｲ）＿＿＿＿
〈誘拐〉

③ 漫画家（ﾏﾝｶﾟｶ）＿＿＿＿
〈真ん中〉

④ 議会（ｷﾞｶｲ）＿＿＿＿
〈機会〉

⑤ 介護（ｶｲｺﾟ）＿＿＿＿
〈解雇〉

⑥ 記号（ｷｺﾟｳ）＿＿＿＿
〈気候・機能・昨日〉

⑦ 原稿（ｹﾞﾝｺｳ）＿＿＿＿
〈健康〉

⑧ 化合（ｶｺﾟｳ）＿＿＿＿
〈加工・可能〉

⑨ 称号（ｼｮｳｺﾟｳ）＿＿＿＿
〈商工・焼香・消耗〉

⑩ 愚図（ｸﾞｽﾞ）＿＿＿＿
〈屑〉

⑪ 釘（ｸｷﾟ）＿＿＿＿
〈茎・国・組〉

⑫ 歓迎（ｶﾝｹﾟｲ）＿＿＿＿
〈関係・感銘〉

⑬ 胡麻（ｺﾞﾏ）＿＿＿＿
〈駒〉

⑭ 継ぐ（ﾂｸﾟ）＿＿＿＿
〈摘む・積む〉

※〈　　〉内はミニマルペアになる単語例

3章で触れたガ行鼻濁音の発生箇所を参考に、語頭にガ行がくる①④⑦⑩⑬は語頭をガ行音で、また語中（②③⑥⑧⑨⑫）と語末（⑤⑪⑭）にガ行が含まれているものは該当箇所を鼻濁音で発音しCDを作成、聴解テープとして使用した。

7.2.3　Test 3　穴埋めテスト

ここでは、一文を聞かせ、ガ行音を含む単語を穴埋め式で記述するテストを実施した。「日本語にある単語（Test2）」に加え、文意というヒントを加えた場合の正答率を見ることを目的とした。テスト作成にあたり、ガ行を含む単語とミニマルペアになる単語を入れても正答となる文を作成[5]、採用した。

（Test 3）

3．テープを聞いた後で、＿＿＿＿の部分に言葉を入れて、文を完成させてください。

① せんでんかつどうは　しきちか゜いで　おねがいします。
（宣伝活動は　敷地外で　お願いします。）　〈敷地内〉

② やまださんに　あったら、このかき゜を　わたしてください。

（山田さんに会ったら、この鍵を　渡してください。）　〈蟹・紙〉

③　わたしは　よく　はなを　かき゜ます。

（私は　よく　花を　嗅ぎます。）　〈かみます〉

④　そんなに　りっぱな　じんぶつは　げんそんしないでしょう。

（そんなに　立派な人物は　現存しないでしょう。）　〈謙遜〉

⑤　このかいがんは　ゆうがたになると　なき゜がおとずれる。

（この海岸は　夕方になると　凪がおとずれる。）　〈何・波〉

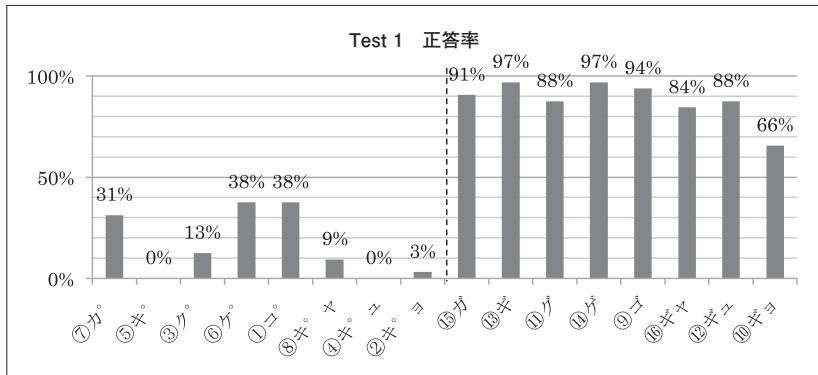
⑥　このもんだいに　がいとうするひとは　てをあげてください。

（この問題に　該当する人は　手を挙げてください。）　〈解答〉

※〈　　〉内はミニマルペアになる単語例

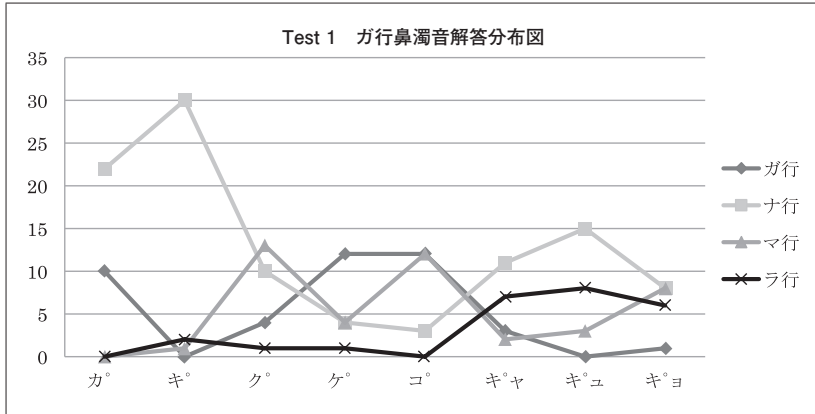
Test2と同様に、語頭にガ行を含む④⑥はガ行音、語中①③と語末②⑤にあるものは、ガ行鼻濁音で発音しCDを作成した。

7.3　テスト結果分析

7.3.1　Test 1　結果分析

（図－３）

点線を境に、左がガ行鼻濁音、右がガ行音である。（以下、図－６、７も同様）ガ行鼻濁音の正答率は全体的に低いことがわかる。ギ、ギュに至っては0%で

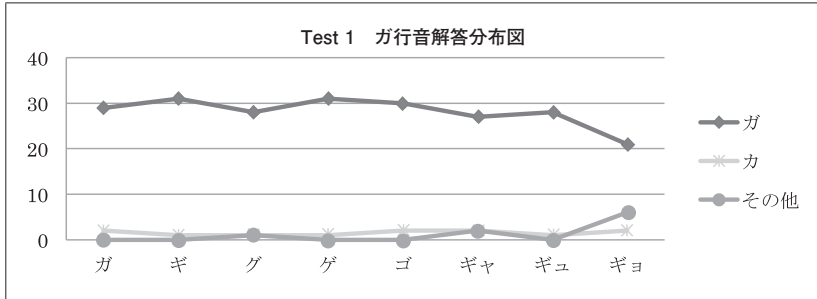
あった。一方、ガ行音は全て第1位に正答がきており、正答率も9割前後のものがほとんどであった。

図－4はガ行鼻濁音の解答分布をグラフに示したものである。

（図－4）

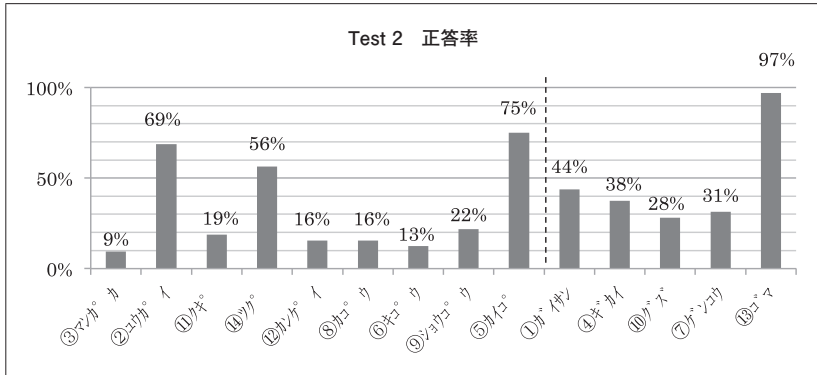
正答が第1位にきているものはゲ・ゴのみであった。正答率0％のギ・ギュでは、ナ行（ニ・ニュ）と解答した被験者数が第1位を占めている。ギャ・ギョを見てもナ行（ニャ・ニョ）がやはり第1位であり、これは川上（1977）と合致している。川上は日本人の傾向として述べているが、中国語話者にも同様の傾向が見られることが、本調査により明らかとなった。また、カ行という誤答は0％というのも特徴の一つと言えよう。

また、ここで注目すべきはラ行への誤答である。本稿において、ガ行と判別困難なペアとしてラ行は挙げていない。そこで、ラ行と誤答した被験者の出身地を調査した。すると、ラ行への誤答は32名中13名に集中しており、うち12名が福建省出身であった。詹伯慧（1983）には、中国南方の閩方言のうち、閩南話の一部（特に厦門地区）に-d、n-、l-がすべて一つの音素に属すため、これらをすべてd-と読む現象があるとの指摘がある。しかし、閩語のうち福州地区を含む閩東語にはこの現象はない。本調査では、被験者が福建省のどの地域出身であるかということまでは追跡することはできなかった。しかし、ラ行と誤答した12名が閩南話エリアの出身であれば、ナ行とラ行を混同した可能性があり、ラ行への誤答の根拠となり得る。また教師へのアンケートの中に

（18）中国の「な」と「ら」が混同する地方（福建省？）の出身者にとっては鼻音の「ガ行」は混乱を招くようだ。

という意見があった。本調査への協力を要請した日本語学校は学習者が全員中国人であり、その多くを福建省からの留学生が占めている。(18) はその学校の教師からの回答である。日常行われている授業の中にも同様の現象があることがわかる。本調査におけるラ行への誤答の出現は、被験者の出身地の方言が影響を及ぼしたようである。

（図－５）

図－５はガ行音の解答分布を示したものである。誤答は少数だが全てにおいてカ行が第2位を占めている。ガ行が鼻音化しなければガ行を正確に聞き取れている被験者が非常に多いことが分かる。また、ギョにのみ複数の解答が見られた（ジョ・ジュ・ウ・キュ）。ガ行音の中でもギョは聞き取りにくい音のようである。

7.3.2　Test 2　結果分析

（図－６）

Test 2　誤答例

（表－5）　　（　）内は解答数

			正答	位置	誤答
鼻濁音	③	カ゜	まんがか (3)	中	まんなか（18）　まんがかい（1）
	②	カ゜	ゆうがい (22)	中	ゆかい（1）　ゆうあい（1）　ゆらい（1）
	⑪	キ゜	くぎ (6)	末	くに（20）　くみ（3）　くき（1）
	⑭	ク゜	つぐ (18)	末	つむ（5）　すむ（1）　すぐ（1）
	⑫	ケ゜	かんげい (5)	中	かんけい（5）　かんめい（1）　かんれん（1）
	⑧	コ゜	かごう (5)	中	かのう（4）　かご（3）　かも（3）　かお（2） たんご（1）　がっこう（1）
	⑥	コ゜	きごう (4)	中	きおん（3）　きこう（1）　きぼう（1）
	⑨	コ゜	しょうごう (7)	中	しょうご(7)　しょうこ(1)　しょうもう(1)
	⑤	コ゜	かいご (24)	末	かいごう（1）　かいこう（1）
濁音	①	ガ	がいさん (14)	頭	ざいさん（6）　かいぜん（3）　だいさん（2） かいさん（1）　かいほう（1）　たいさん（1）
	④	ギ	ぎかい (12)	頭	きかい（12）　じかい（2）　きがい（1）
	⑩	グ	ぐず (9)	頭	くつ（2）　くず（1）　※ぐつ（10）[6]
	⑦	ゲ	げんこう (10)	頭	げんご（7）　けんこう（7）　ぎんこう（1）
	⑬	ゴ	ごま (31)	頭	

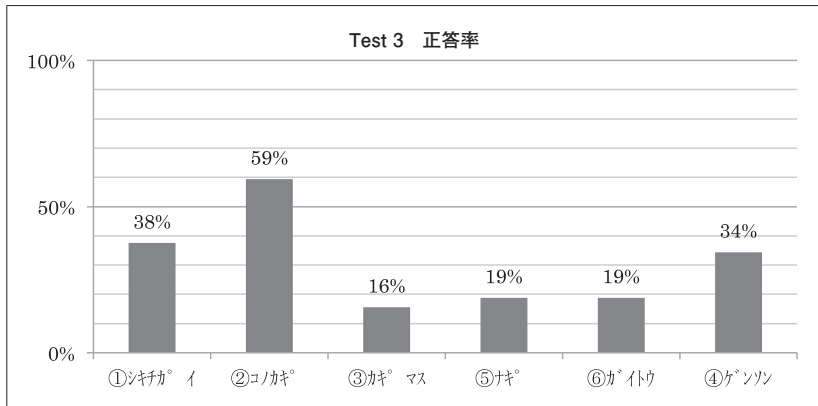
ガ行鼻濁音ではナ行、マ行、ラ行の誤答が目立つ。また、Test1では見られなかったカ行の誤答もある。ガ行音ではTest1とは異なり、カ行以外の誤答も見られた。

③「まんがか（漫画家）」⑪「くぎ（釘）」では誤答である「まんなか（真ん中）」

「くに（国）」のほうが解答数は圧倒的に多かった。これはガ行が鼻音化したためのナ行への誤答とも受け取れるが、聞こえた単語が未知語だったため、既知語の中から近い音の単語を探したという解釈もできる。また、正答率上位の⑤「かいご（介護）」（75％）②「ゆうがい（有害）」（69％）はN2漢字であり、N1、N2合格を目指す被験者たちにとっては、馴染みがあった単語であった可能性もある。これらは、音以外の判断要素が誤答を引き起こした例と言える。

ガ行音ではTest1とは異なる結果が出た。単語においては、ガ行が鼻音化しなければガ行部分が正しく聞き取れるというわけもないようである。⑩「ぐず（愚図）」（28％）は正答率が最も低い。これはN1漢字であり、馴染み度が低いための誤答とも受け取れる。同様にN1漢字である①「がいさん（概算）」も「ざいさん（財産）」（N2漢字）への誤答が多く、馴染み度が影響しているものと思われる。最後に⑬「ごま」が高正答率なのは、認知度の高い単語で、かつ正しく聞き取れたためと言えるであろう。

Test2では、「日本語の単語」というヒントが大きく影響しているものと思われる。聞こえた単語が未知であれば、既知語の中から近い音の単語を探す作業をし、また、既知語であってもガ行音を違う音と認識した場合、同様の作業が行われた可能性がある。「聞こえたとおりに」という指示があったため、未知語でもガ行が正しく聞き取れていれば正答は導けたものと思われる。しかし、それが馴染みのある単語に近い音で聞こえた場合、既知語の中から探した可能性は捨てきれない。

7.3.3　Test 3　結果分析

（図－７）

Test 3　誤答例

（表－6）　　（　）内は解答数

			正答	位置	誤答
鼻濁音	①	カ゜	しきちがい（12）	中	しきち（3）　しきちない（2）
	②	キ゜	このかぎ（19）	末	このかみ（7）　このかに（2）
	③	キ゜	かぎます（5）	中	かいます（16）　かきます（5）　かみます（2）　かります（1）
	⑤	キ゜	なぎ（6）	末	なに（19）　なんに（3）　なり（1）
濁音	⑥	ガ	がいとう（6）	頭	かいとう（6）　がいど（5）　かいどう（4）
	④	ゲ	げんそん（11）	頭	げんそう（9）　けんそう（2）　げんしょう（1）

Test3では､「日本語の単語（Test2)」に加え文意というヒントを与え､誤答（ミニマルペア）を入れても文意が通じるような例文を作成し実施した。

Test3の誤答のうち、日本語にある単語を表－6にまとめた。ここでは、正答率が最も多い「このかぎ」と、最も低い「かぎます」に注目してみる。②「このかぎ（鍵)」はナ行、マ行への誤答もあるが、正答が19名で第1位であった。これは、文意から正答を導けた例と言えよう。「かぎ」が「かみ」「かに」に聞こえた被験者が､文意から正答である「かぎ」を導けた可能性もある。もちろん､「かぎ」「かみ」「かに」は初級で登場する単語であり、被験者にとって馴染み度が高い言葉であったことは言うまでもない。一方、③「かぎます（嗅ぎます)」では「かいます」と解答した被験者が最も多く、これは、逆に文意が誤答へと導いた可能性がある。「かぎます」と正しく聞き取れた被験者でも、これが未知語であった場合、文意から既知語である「かいます」を類推して、これを正答とした可能性もある。

8．まとめ

本稿では中国語話者である日本語学習者に、ガ行鼻濁音が実際にどのように聞こえているのか、ガ行鼻濁音をモーラ（Test1)、単語（Test2)、文の一部としての単語（Test3）という3パターンのテストを実施し、その傾向を調査した。

Test1では、ガ行が鼻音化した場合の誤答は、ナ行・マ行に加えラ行もあった。これは、被験者の出身地（閩南語エリア）が、ナ行とラ行が混同する地域であるため、この方言が今回の調査に影響したものと思われる。また、中国語話者は清濁の判別が難しいとされているが、鼻濁音を聞かせた場合のカ行への誤答はなかった。一方、ガ行音を聞かせた場合の正答率は9割前後と高い数値が得られ、数少ない誤答はほとんどがカ行であった。つまり、中国語話者にとってガ行が鼻音化した場合、他の音に聞こえることはあってもカ行に聞こえることはないと言える。ガ行鼻濁音は、彼らに濁音と知覚されない音であることが本調査より明らかとなった。

Test2では、判断要素を聴覚だけではなく、「日本語にある単語」というヒントも与え、ガ行音を含む単語を聴解させ、書き取りテストを実施した。さらにTest3では、「文意」という要素を加え、同様にテストを実施した。結果は必ずしもTest1と同様の傾向を示すものではなかった。ここでは単語の既知・未知が結果を左右する可能性が示唆された。

本調査結果において注目すべき点は、ガ行音が鼻音化し、違う音と知覚された場合、全く違う意味の言葉として理解される危険性がある点である。ガ行鼻濁音の扱いについては教師間に共通の認識はなく、見解が分かれるところである。しかし、実際に教材用のCDに鼻濁音が使われている場合もあり、また、衰退の一途をたどっているとは言え、まだ消滅したわけではなく、共通語の中に存在している。ガ行鼻濁音の発音指導の必要性は感じないが、この音の存在を学習者が知っておく必要性は感じる。日本語教育現場において、教師間でガ行鼻濁音についての共通の認識を持ち、その扱いを考えるべきではないだろうか。

９．今後の課題

本調査を終え、以下の課題が残った。

1．日本語学習者が接する日本人は教師だけではないため、教師以外の日本語母語話者に対するガ行鼻濁音使用調査をさらに幅広く実施する必要がある。
2．テスト実施後に、調査対象語に対する被験者の認知度テストが必要である。
3．中国語圏をさらに方言別に細分化し、方言エリアごとに再調査する必要がある。

以上3点を念頭に置き、中国語圏の被験者を対象に再調査を行うと共に、今後、他の言語圏の日本語学習者に対しても同様の調査を行い、本研究を継続していくことを今後の課題とする。

注

1　ミニマルペアとは、ある言語において、語の意味を弁別する最小の単位である音素の範囲を認定するために用いられる、1点のみ言語形式の違う2つの単語のことをいう。例えば、日本語においては先[saki]と滝[taki]は語頭の音素/s/と/t/のみが異なり、この違いにより先と滝の弁別をしている。このように、同じ位置（この場合、語頭の子音部分）にある/s//t/という一対の音素により弁別されるペアをミニマルペアと呼ぶ。

2　学習者出身地内訳：福建（22名）、山東（4名）、重慶（2名）、天津・遼寧・安徽・浙江（各1名）

3　(Japanese Language Proficiency Test、略称JLPT、日能試）は、公益財団法人日本国際教育支援協会と独立行政法人国際交流基金が主催の、日本語を母語としない人を対象に日本語能力を認定する検定試験である。最上級のN1から最下級のN5まで5段階のレベルがある。

4　聴解ＣＤ作成に際し、

　　1．日本語教材は東京式アクセントが採用されている。

　　2．テスト実施地域が横浜（東京式アクセントエリア）である。

以上、2点の理由により東京式アクセントを採用した。

5　例）３－②　　山田さんに会ったら、この鍵（かぎ）を　渡してください。

正解は「この鍵」であるが、鍵の部分にミニマルペアになる蟹（かに）・紙（かみ）を入れても文意が通じる。

6　「ぐず」における解答数第1位は「ぐつ」という日本語にはない単語であった。これは「愚図」が被験者にとって未知語であったことと、語末「ず（づ）」（濁音）が「つ」（清音）と聞き間違えたことが原因と思われる。

参考文献

Eleanor Harz Jorden (1962) “Beginning Japanese part1” New Haven and London, Yale University Press

大橋純一（2007）「ガ行鼻濁音の実態と評価の変遷」『昭和前期日本語の問題点』明治書院pp202-220

加藤宏明・田嶋圭一・アマンダ　ロスウェル・山田玲子・ケビン　マンホール（2004）「母語話者と非母語話者による日本語特殊拍音素の知覚」『電子情報通信学会技術研究報告』pp43-48

川上秦（1977）『日本語音声概説』桜楓社

金田一春彦（1978）『日本語音韻の研究』東京出版

近藤和弘・泉良・中川清司（2001）「新しい日本語了解度試験方法の評価」『電子情報通信学会技術研究報告』pp25-32

近藤和弘・泉良・藤森雅也・加賀類・中川清司（2007）「二者択一型日本語音声了解度試験方法の検討」『日本音響会報』pp196-205

朱春躍（2010）『中国語・日本語音声の実験的研究』くろしお出版

詹伯慧（1983）『現代漢語方言』（株）光生館

玉村文郎（1998）『新しい日本語研究を学ぶ人のために』世界思想社

土岐哲（2010）『日本語教育からの音声研究』ひつじ書房

日本放送協会編（1987）『NHK放送のことばハンドブック』日本放送出版協会

NHK放送文化研究所編（1998）『NHK日本語発音アクセント辞典　新版』日本放送出版協会

早田輝洋（2005）『世界の中の日本語』朝倉書店

松崎寛（2000）「初級日本語学習者向けアクセントのミニマルペア」『広島大学日本語教育学科紀要』pp39-46

劉佳琦（2004）「中国人日本語学習者における清濁の混同とその方言差」『早稲田大学大学院日本

語教育研究科第一回日本語教育と音声研究会』pp1-4